

中学生の学校享受感に影響を与える教師のユーモア
——生徒による「教師のユーモア表出」認知と生徒のユーモア感知力に着目して——

熊崎 友望
山守 由純

1. はじめに

今日、中学生のいじめや不登校、学級崩壊など、不適応行動や問題行動の増加が社会問題になっている。しかし、一方で、平成 15 年度文部科学省「学校教育に関する意識調査」（文部科学省，2003）によれば、「学校の生活に満足している」とする中学生は 78%にのぼる。この結果をみると、中学生の多くは学校生活を享受していると言える。

古市（2004）において、学校生活享受感情の重要な規定要因は、学級適応および教師適応であることが明らかにされており、子どもたちの学校の楽しさに影響を与える要因の一つとして、教師の行動が重視されている。上田・小林（2008）は、なかでも教師のユーモアに注目し、小学生が認知する教師のユーモアは、学校享受感に影響を与えることを明らかにした。しかし、中学生を対象として「教師のユーモア」の影響力を実証的に検討した研究はない。また、子ども自身の「ユーモア感知力」がそこに関与する可能性について、これまで言及した研究は見当たらない。ところが、学校では、子どもたちのユーモア性の育成が重要であるとの指摘（青砥，2009）があり、現在の学校教育で叫ばれている様々な問題解決の方策として、ユーモア性の育成が重要なものと示唆される。

そこで本研究では、中学生の認知する「教師のユーモア表出」や、中学生の「ユーモア感知力」を測定する尺度を開発し、中学生の状況を把握することを第一の目的とする。その上で、中学生の認知する「教師のユーモア表出」が中学生の学校享受感と関連するのか、さらにはそれらの関連性に中学生自身の「ユーモア感知力」が関与するのかを検討することを第二の目的とする。

2. 研究方法

(1) 対象

- ・ A 県内の中学校 1 校と、B 県内の中学校 2 校の 1～3 年生、計 362 名を対象に調査を実施
- ・ 有効回答 322 名（男子名 170，女子 152 名，有効回答率 89.0%）

(2) 手続き

- ・ 平成 24 年 11 月初旬から 11 月中旬
- ・ 学級単位で担任教師の教示による無記名式、集団・自記式質問紙法で実施・回収

(3) 内容

- 1) 学校享受感：古市（1997，2004）の小・中学生の学校生活享受感情測定尺度を使用した。10 項目から成り、1 因子構造である。
- 2) 生徒による「教師のユーモア表出」認知：上田・小林（2008）の「教師のユーモア行動尺度」を元に、平成 24 年 10 月に実施した予備調査の結果を受けて修正した 18 項目を使用した。
- 3) 生徒のユーモア感知力：牧野（1997）の「ユーモア感知行動尺度」を元に、平成 24 年 10 月に実施した予備調査の結果を受けて修正した 13 項目を使用した。

3. 結果および考察

(1) 学校享受感尺度得点の算出と信頼性の検討

Cronbach の α 係数を求めたところ、 $\alpha = .92$ であり、十分に高い内的整合性が確認された。そこで、原尺度に則り合計を算出し、それを項目数で割ったものを「学校享受感」得点とした。

(2) 生徒による「教師のユーモア表出」認知尺度の構造

予備調査で作成した 18 項目について、度数分布の偏りがある項目は見られなかった。そこで、全項目による因子分析を実施したところ、因子負荷量 .40 以下の項目が見られたため、その 1 項目を削除した後、再度因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。その結果、固有値 1 以上の基準で 2 因子が抽出された。第 1 因子は、身体的な表現を使うことや子どもの心を支えるという目的があり、子どもの教師に対する親密性と関連するようなユーモアであることから、「親和的ユーモアの表出認知」と命名した。第 2 因子は、面白い話で相手を楽しませたり、積極的な笑いを誘うようなユーモアに関する項目が含まれたため、「遊戯的ユーモアの表出認知」と命名した。下位分類は、小学生を対象とした上田・小林（2008）と同様の結果となったと言え、中学生においても、教師のユーモア表出を思想的にとらえる側面と、感覚的にとらえる側面があることが示唆されたと言える。

信頼性を検討するために、 α 係数を算出したところ、いずれも十分に高い内的整合性が確認された ($\alpha=.89\sim.91$)。そこで、各因子に属する質問項目の総和を項目数で割ったものを、下位尺度得点とした。

学年と性別を要因とする2要因分散分析を行った結果、交互作用は認められず、「親和的ユーモアの表出認知」($F(2, 321)=12.91, p<.01$)でも、「遊戯的ユーモアの表出認知」($F(2, 321)=14.54, p<.01$)でも、学年の主効果のみ有意な結果が得られた。Tukey法による多重比較を実施したところ、両下位尺度ともに2年生・3年生>1年生であった。これは、2年生・3年生では、教師がその役割を果たしているか、教師としての資質を有しているかといった「役割遂行評価」を意識しているという指摘(中井・庄司, 2008)や、学年が高くなると教師の絶対性が薄れ、教師との親和性の高い関わりが増えるという指摘(細田・田嶋, 2009)から、中学生期の対人的信頼感の発達が関連していると考えられる。すなわち、学年が進むにつれて、教師との親密な関わりが増え、十分な信頼関係が構築されたことにより、教師のユーモアを的確に把握する態度が形成されやすくなったため、学年の高い2年生・3年生が「教師のユーモア表出」を認知しやすいという結果が得られたと考えられる。

性差について、上田・小林(2008)は、小学生では、女子のほうが、男子に比べ心身の発達が早く、サポートにおける教師の行動の目的や意図を認知しやすいため、教師の「親和的なユーモア表出」を認知しやすいことを示している。しかし、本研究では、「親和的ユーモアの表出認知」「遊戯的ユーモアの表出認知」のいずれも性差は認められなかった。「親和的ユーモアの表出認知」でも性差が見出されなかったことは、小学生から中学生となり、男子も教師の行動の目的や意図に気付きやすくなったためだと考えられる。一方、「遊戯的ユーモアの表出認知」については、上田・小林(2008)は、小学生で性差は認められなかったことを示している。本研究でも「遊戯的ユーモアの表出認知」で性差は認められず、上田・小林(2008)と同様の結果が得られた。このことは、中学校段階においても「遊戯的ユーモア表出認知」は、心身の発達状況や教師の意図を認知する能力とは関係なく認知されるためだと考えられる。

(3) 生徒のユーモア感知力尺度の構造

予備調査で作成した13項目について、度数分布の偏りがある項目が認められた。そこで、それら3項目を削除した上で因子分析を実施したところ、因子負荷量.40以下の項目が見られたため、その2項目を削除した後、再度因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った。その結果、固有値1以上の基準で2因子が抽出された。第1因子は、原尺度(牧野, 1997)で遊戯的ユーモア感知に相当する項目と、支援的ユーモア感知に相当する項目が含まれた。これらのユーモア感知力は、自己や他者を楽しませたり、励ますという目的があり、表出者と感知者の友好的な人間関係に役立てられるユーモアを感知する能力と考えられるため、「友好的なユーモアの感知力」と命名した。第2因子は、原尺度(牧野, 1997)で攻撃的ユーモア感知に相当する項目であることから、「攻撃的なユーモアの感知力」と命名した。先行研究(牧野, 1997)と異なる下位分類になった背景には、対象年齢の違いが影響していると推察される。中学生段階では、支援的なユーモアを感知する力が備わっていないものの、その後の成長で獲得する可能性もあると考えられ、ユーモア感知力の発達的变化については、今後さらなる検討を加える必要がある。

信頼性を検討するために、 α 係数を算出したところ、いずれも高い内的整合性が確認された ($\alpha=.77\sim.78$)。そこで、各因子に属する質問項目の総和を項目数で割ったものを、下位尺度得点とした。

学年と性別を要因とする2要因分散分析を行った結果、「攻撃的なユーモアの感知力」における学年の主効果のみ有意な結果が得られた ($F(2, 316)=4.64, p<.01$)。Tukey法による多重比較を実施したところ、3年生>1年生であった。戸田・渡辺(2012)は、中学1年生は、あいまいな攻撃で被害を受けた場合には相手の敵意を想定し、不満や怒りなどの感情が喚起されやすく、またそれらは、学年が進むにつれて減少するということを示している。したがって、「攻撃的ユーモア」を「楽しむことなのか攻撃なのか」というあいまいな状況としてとらえると、1年生は「悪意を持って行った」と相手の意図を敵意に帰属しやすく、3年生の方が笑いとして感知しやすかったため、「攻撃的ユーモア感知力」が高いという結果が得られたものと考えられる。

性差について、牧野(1998)および谷・大坊(2008)は、女性は遊戯的ユーモアを表出・感知する能力である「遊戯的ユーモア・センス」が高く、男性は「攻撃的ユーモア・センス」が高いということを指摘している。しかし、本研究では、「友好的なユーモアの感知力」「攻撃的なユーモアの感知力」のいずれも性差は認められなかった。いずれの先行研究でも、対象は大学生であり、中学生のユーモア感知力の性差に関する検討はこれまでなされていない。ユーモア感知力の性差が発達に伴って生じてくるのか、だとすれば性別のどのような側面と関連があるのかに関して、今後のさらなる検討

が必要である。

(4) 学校享受感と生徒による「教師のユーモア表出」認知との関連

学校享受感と生徒による「教師のユーモア表出」認知との関係を検討するために、Pearson の積率相関係数を算出することとした (Table1)。その結果、生徒による「教師のユーモア表出」認知が高いほど学校享受感が高くなることが示された。これは、上田・小林 (2008) に一致している。したがって、中学生においても、教師のユーモア表出を認知するほど、学校が楽しいと感じやすくなることが示されたと言える。また、それは教師の表出するユーモアの種類にはよらず、いかなる種類のユーモアであっても同様の関連を示すと言える。

Table1 生徒による「教師のユーモア表出」認知と学校享受感の相関係数

	親和的ユーモア表出の認知	遊戯的ユーモア表出の認知
学校享受感	.22 ***	.30 ***

*** $p < .001$

(5) 学校享受感と生徒のユーモア感知力との関連

学校享受感と生徒のユーモア感知力との関係を検討するために、Pearson の積率相関係数を算出することとした (Table2)。その結果、「友好的なユーモアの感知力」が高いほど学校享受感が高くなることが示された。「友好的なユーモアの感知力」は、他者を楽しませたり、励ますことを動機として表出されたユーモアを感知する力であり、それが高いと他者からの好意や支援へ結びつき良好なメンタルヘルスが保たれるが、「攻撃的なユーモアの感知力」は、他者を批判したり非難するようなユーモアを感知する力であり、それが高くても他者からの支援に結びつかないので、このような違いが生じたと考えられる。したがって、中学生にとっての精神的健康の一つの指標となる「学校享受感」も、友好的なユーモアを感知する能力が高いほど高まるのだと指摘できよう。よって、青砥 (2009) の指摘するユーモア性の育成は、主に「友好的なユーモアの感知力」についてなされるべきであると示唆される。

Table2 生徒のユーモア感知力と学校享受感の相関係数

	友好的なユーモアの感知力	攻撃的なユーモアの感知力
学校享受感	.35 ***	-.02

*** $p < .001$

(6) 生徒による「教師のユーモア表出」認知と生徒のユーモア感知力との群分けによる学校享受感の違い

生徒による「教師のユーモア表出」の表出認知尺度について、各下位尺度の平均値を基準に、対象者をそれぞれ高低群分けした。以下、高群を H、低群を L と記す。同様に、生徒のユーモアの感知力尺度について、各下位尺度の平均値を基準に、対象者をそれぞれ高低群分けした。以下、高群を h、低群を l と記す。

その上で、「親和的ユーモアの表出認知」と「友好的なユーモアの感知力」の高低の組み合わせにより、4 群分けし、学校享受感に差が見られるかを検討するために、群を要因とする 1 要因分散分析を行ったところ、有意な結果が認められた (Table3)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、 $H_h > H_l \cdot L_l$, $L_h > L_l$ であった。同様に、「遊戯的ユーモアの表出認知」と「友好的なユーモアの感知力」の高低の組み合わせによる群分けによっても、有意な結果が認められた (Table4)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、 $H_h > H_l \cdot L_h > L_l$ であった。以上の結果から、友好的なユーモアの感知力が高く、「教師のユーモア表出」を多く認知していると学校享受感が高く、また、友好的なユーモアの感知力が低ければ、たとえ「教師のユーモア表出」をたくさん認知していても、「教師のユーモア表出」を少なく認知している人と学校享受感は変わらなかった。「友好的なユーモアの感知力」は、牧野 (1997) が指摘する「遊戯的ユーモア感知」を含んだ項目構成となっている。牧野 (1998) は、遊戯的ユーモアを表出したり、感知する能力が高い人は、遊戯的ユーモア刺激をよりおもしろいと感じることを明らかにしている。すなわち、「友好的なユーモアの感知力」の高い生徒は、認知した教師のユーモア表出をよりおもしろいと感じていると推測される。一方、「友好的なユーモアの感知力」の低い生徒は、たとえ教師のユーモア表出をたくさん認知していても、ユーモア刺激を楽しむ能力が低く、教師のユーモア表出をあまりおもしろいと感じていないと考えられる。すなわち、「友好的なユーモアの感知力」が高いと、教師の表出するユーモアが他者の気持ちを明るくし励ます効果をもつユーモアだと気付きやすく、表出者である教師に対する好意的認知や、教師との対人関係における親密性につながる (越・櫻井, 2008) と示唆される。このように、親和感もてる先生がいるとき、学校生活が楽しく感じられる (古市, 2004) ので、「友好的なユーモアの感知力」の

高い生徒は、教師のユーモア表出を多く認知している、より学校享受感が高まるという結果になったと考えられる。

Table3 「親和的ユーモアの表出認知」と「友好的なユーモアの感知力」の群分けによる学校享受感の差

	Hh	HI	Lh	LI	F値	多重比較
学校享受感	3.21 (.53)	2.80 (.64)	2.99 (.72)	2.64 (.68)	14.42 ***	Hh>HI, LI Lh>LI

()は標準偏差, *** $p<.001$

Table4 「遊戯的ユーモアの表出認知」と「友好的なユーモアの感知力」の群分けによる学校享受感の差

	Hh	HI	Lh	LI	F値	多重比較
学校享受感	3.21 (.56)	2.92 (.69)	3.01 (.66)	2.61 (.62)	16.54 **	Hh>HI・Lh >LI

()は標準偏差, ** $p<.01$

Table5 「親和的ユーモアの表出認知」と「攻撃的なユーモアの感知力」の群分けによる学校享受感の差

	Hh	HI	Lh	LI	F値	多重比較
学校享受感	3.02 (.60)	3.11 (.62)	2.75 (.68)	2.82 (.74)	4.58 **	HI>Lh, LI

()は標準偏差, ** $p<.01$

Table6 「遊戯的ユーモアの表出認知」と「攻撃的なユーモアの感知力」の群分けによる学校享受感の差

	Hh	HI	Lh	LI	F値	多重比較
学校享受感	3.04 (.62)	3.22 (.62)	2.79 (.65)	2.73 (.69)	9.24 ***	Hh・HI>Lh・LI

()は標準偏差, *** $p<.001$

徒の「友好的なユーモアの感知力」が高い場合であると指摘できる。よって、中学生の学校享受感を「ユーモア」の側面から検討する際、教師のユーモア表出を増加させるだけでなく、生徒の「友好的なユーモアの感知力」を高める視点も必要であることが確認された。

しかしながら、本研究ではいくつかの課題が見出された。中学生にとって2因子構造の「ユーモア感知力」尺度が本当に妥当なのかを追及する必要があること、より中学生の実態に即した結果を得るために、学校別の学校享受感に関する分析を行うことなどである。

【主要引用文献】

- 青砥弘幸 2009 学校教育における「ユーモア性」の育成に関する一考察—「ユーモア能力」という概念の提案— 笑い学研究, 16, 59 - 67.
- 古市裕一 1997 小・中学生における学校生活の楽しさとその規定要因 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 248.
- 古市裕一 2004 小・中学生の学校生活享受感情とその規定要因 岡山大学教育学部研究集録, 126, 29 - 34.
- 細田 絢・田嶋誠一 2009 中学生のソーシャルサポートと自他への肯定感に関する研究 教育心理学研究, 57, 309 - 323.
- 越 良子・櫻井弥生 2008 ユーモアが学級内の局所的及び大局的対人関係と学級風土に及ぼす影響 上越教育大学研究紀要, 27, 73 - 83.
- 牧野幸志 1997 ユーモア行動の構造に関する研究 広島大学教育大学紀要 第一部 心理学, 46, 41-48.
- 牧野幸志 1998 ユーモア・センス尺度の作成 広島大学教育大学紀要第一部心理学, 47, 37 - 46.
- 文部科学省 2003 学校教育に関する意識調査(中間報告) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryu/03091801/005/001.htm
- 中井大介・庄司一子 2008 中学生の教師に対する信頼感と学校適応感との関連 発達心理学研究, 19, 57 - 68.
- 谷 忠邦・大坊郁夫 2008 ユーモアと社会心理学的変数との関連についての基礎的研究 対人社会心理学研究, 8, 129 - 137.
- 戸田まり・渡辺恭子 2012 あいまいな攻撃に対する解釈と対処行動の発達: 社会的情報処理の視点から 発達心理学研究, 23, 214 - 223.
- 上田明日美・小林朋子 2008 小学生の学校の楽しさに影響を与える教師のユーモア行動に関する研究 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター - 紀要, 15, 125 - 132.

一方、「親和的ユーモアの表出認知」と「攻撃的なユーモアの感知力」の高低の組み合わせによる群分けによっても、有意な結果が認められた (Table5)。Tukey法による多重比較を行ったところ、HI>Lh・LIであった。「遊戯的ユーモアの表出認知」と「攻撃的なユーモアの感知力」の高低の組み合わせによる群分けによっても、有意な結果が認められた (Table6)。Tukey法による多重比較を行ったところ、Hh・HI>Lh・LIであった。以上の結果から、生徒自身の攻撃的なユーモアの感知力には関係なく、教師が親和的ユーモアや遊戯的ユーモアを表出していると認知していることが、より学校享受感を高めると指摘できる。

4. まとめ

以上により、教師のユーモアは全般的に中学生の学校享受感を高める効果があると言えるが、その効果が最も有効に働くのは、生